

## 〔論 文〕

# 論作文産出におけるメタ認知的知識の側面に関する検討

崎 濱 秀 行

## I はじめに

本稿の目的は、先行研究を基に、論作文（小論文等、自身の意見を筋道立てて述べるような文章）作成に関わる書き手のメタ認知的知識の側面について検討を加えることである。

崎濱（2010）は、今日の高等教育課程において、大学での勉学を支えるための日本語表現法をはじめ、広義の「日本語」の教育が、ほとんどの大学で実施されていることを指摘した。また、その中でも、文章産出教育を基礎教育の1つとして取り入れる大学が年々増加していることについても述べている（私学高等教育研究所、2003）。さらに、このような教育が取り入れられるようになった要因として、各教育段階での文章産出スキル育成に関する教育の難しさ（崎濱、2003；2005；2008）、大学生の読み書き能力低下（福岡、2006）といったことがらを挙げている。

このような文章産出に対する困難さを抱えた状況は日本のみならず、たとえば、パラグラフライティング等のライティング教育が盛んなアメリカにおいても見られる。1998年および2002年の National Assessment of Educational Progress においては、学齢期にある児童生徒が文章産出に非常に困難を感じており、小学4年生・中学2年、高校3年生の児童生徒の大部分が、学年に必要なレベルに満たなかったことが報告されている。内訳をみると、生徒のうちの25%は有能な書き手であるが、残りは異なるとのことであった（Persky, Daane, & Jin, 2003）。Intersegmental Committee of Academic

Senates（2002）は、アメリカにおいて、5人に一人の大学初年次生がリメディアルの作文クラスの受講が必要であること、半数以上の学生は、誤りなしで作文を書くことができないことを指摘した。

このように、国内外を問わず文章産出への困難さに関する指摘が見られる中、我が国においては文章産出スキル育成に関する教育がなされるようになり、その数は増加している（小野、1998）。また、このような教育を取り入れた授業について、受講学生から好評価を得ているとの報告も見られる（向後、2002；吉倉、1999）。しかし、文章を書く教育の重要性が指摘されている一方で、学生が実際に文章を書くとするればどのような文章産出活動に着目すれば良いのか、着目した活動を効率的に行う上で、指導者はどのような介入を行えば有効であるのか、といった点は明らかにされていない（崎濱、2003）。そのため、吉倉（1999）が指摘するように、大学における授業場面では、担当者がそれぞれに試行錯誤を重ねながら教育を続けているのが現状である。このようなことが生じる原因の1つとして、文章産出という活動そのものが極めて複雑な認知的活動であることが先行研究において指摘されている（Ransdell & Levy, 1996）。その中でも特に難しい活動として、Bereiter & Scardamalia（1987）は、内容の生成（generation of content）、文章産出のための構成の作成（creating an organizing structure for composition）、ゴールの作成や高次のプランニング、文章産出活動の効率的な遂行、テキストの校正やゴールの作成のし直しと

いった、文章産出活動の主要な側面ともなり得る事項を挙げている。

これらの点を踏まえると、文章産出が極めて困難な認知的活動の一つであると言えよう。しかしながら、文章産出スキル育成に関する教育の遂行及びその内容の改善は大学教育における急務な課題の1つであり、改善に向けた知見の確立が強く求められる(崎濱, 2005)。そのため、文章産出活動を構成する側面について検討し、構成側面の中で各々の書き手が不得意とする側面のスキルを高めるための教育活動を進めていくことが大切であると言えよう。

このような事情を考慮し、本稿では、今後の教育活動を進める上でも必要な、書き手の文章産出活動を構成する側面について、先行研究を基に見出すことを主な目的とする。

ところで、文章産出に際しては、たとえば「まとまりのある文章を書く」「論点を明確にして書く」といったことを書き手自らが意識し、文章産出活動を行う。これらは、自身の産出文章をどのような形にすれば良いか、そのためにどのような活動を行えば良いのか、といった、文章産出活動(あるいは文章産出活動を効果的に進めること)に関する知識の一つである。また、これらの知識を用いて、実際に自身の文章産出活動をコントロールし、適切に実行する方向性をとっていることが考えられる。これらはメタ認知と呼ばれているが、このメタ認知を適切に機能させることは文章産出活動にとっても重要である(崎濱, 2003)。そこで、以下ではまず、メタ認知について概説し、その結果を踏まえ、文章産出に関連するメタ認知の側面について触れることとする。

## Ⅱ メタ認知とは

メタ認知とは、自身の認知についての認知(あるいは知識)・認知的活動に関する適切な、意識的な制御やコントロールのことを指す用語である(Brown, 1980; Ertmer & Newby, 1996; Flavell, 1979; McCormick, 2003)。たとえば、

ある学習を進める時にこれから何をどうやって学習するかを考えることや、学習する時に大切なところはどんなところかを考えながら学習を進める、といったことが挙げられる。元々はFlavellやBrownらによって使用され始め、こうした自分の認知活動についての知識や自身の認知活動の制御の際に用いられるという側面を有している。たとえば学校場面であれば、何らかの学習場面や問題解決場面でいつどのような方略を用いて学習や問題解決を行うかという判断が求められることがあり、その際、関連する知識を活用することがある。このようなことから、メタ認知は学習活動を支える重要な事項の一つであり、その能力育成は今日の学校教育においては極めて重要であると言えよう。

先にも挙げたように、メタ認知には、「認知活動に関する知識」の側面、「認知活動の制御」の大きく2つの側面が存在し、その名称についても研究者間で必ずしも一致しているとは言えないのが現状であるが、三宮(2008)は、その特徴を基に、「認知についての知識」の側面(メタ認知的知識)、「認知のプロセスや状態のモニタリング/コントロール」(メタ認知的活動)の2側面からメタ認知を以下のように分類した(図1参照)。

### 1. メタ認知的知識

メタ認知的知識には、人間(自分や他者、人間一般)の認知特性についての知識、課題についての知識、方略についての知識などが含まれる。

このうち、人間についての知識とは、個人内での認知特性についての知識(例:私は計算問題を解くのが苦手である)などが挙げられる。課題についての知識とは、課題の性質が私たちの認知活動に及ぼす影響についての知識を指す。たとえば「小数の計算では、小数点以下の桁数が増えると答えの小数点をつけ間違いやすくなる」といったことが挙げられる。方略についての知識とは、目的に応じた効果的な方略の使用についての知識を指す。たとえば「相手が

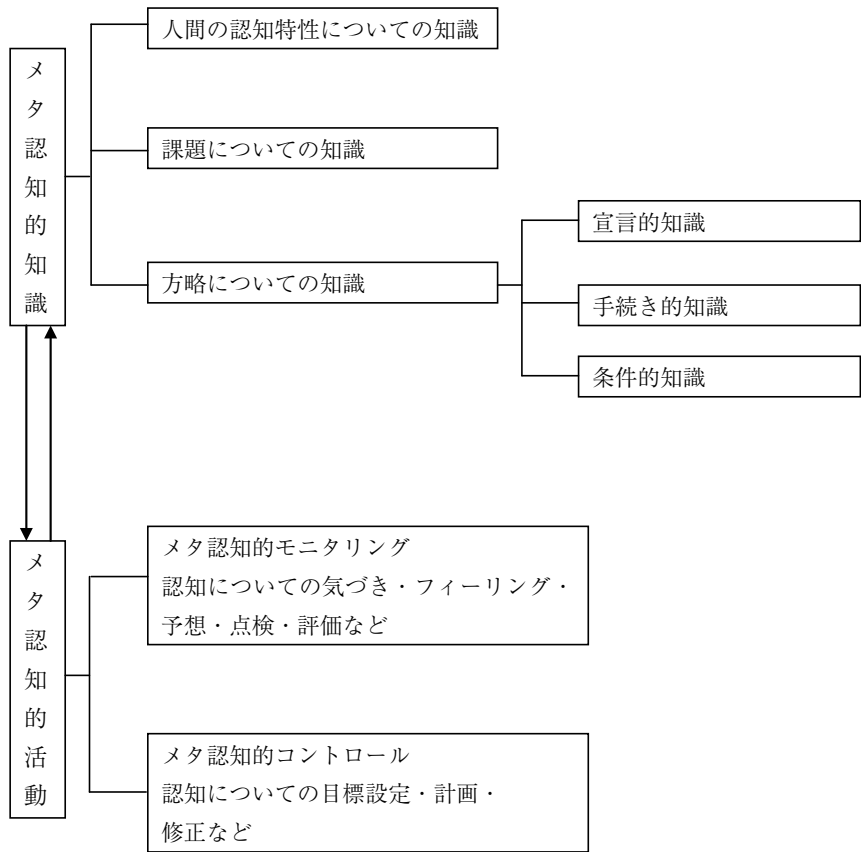


図1 メタ認知的知識・メタ認知的活動の分類（三宮，2008）

よく知っている内容にたとえることで、難しい話を理解しやすくすることができる」などが挙げられる。Schraw & Moshman (1995) は、方略についての知識について、①宣言的知識（方略の内容についての知識）、②手続き的知識（方略をどう使えば良いかに関する知識）、③条件的知識（方略をどのように使えば良いかに関する知識）の3つに分類している。

2. メタ認知的活動

メタ認知的知識をベースにして、学習活動を行う前（事前段階）、学習活動の最中（遂行段階）、学習活動後（事後段階）に、自身の行う（あるいは行った）活動について、何らかの評価を行う場合がある。たとえば学習活動の前、「自分の意見を文章にまとめる課題は難しそう

だ」といった形で、課題の困難度合いを評価することがある。また、課題が終わった後、「結論部分がうまく書けなかったのは、書き出しの部分に時間を割きすぎたからだ」といった形で、自分の課題達成度合いに関する評価を行うことがある。このような評価を行うにあたり、文章産出活動時（遂行段階）において、我々は、「文章を書く時は時間配分に気をつける必要がある」といった、何らかのメタ認知的知識を実際の文章産出場で活用しようとしたであろう。こうしたことはメタ認知的活動と称しているが、その中でも、各段階での活動の評価・点検・予測等を伴った活動については、メタ認知的モニタリングと言われている。

一方、こうしたモニタリングを経て、次の文章産出活動の際には「文章を書く時は時間配分

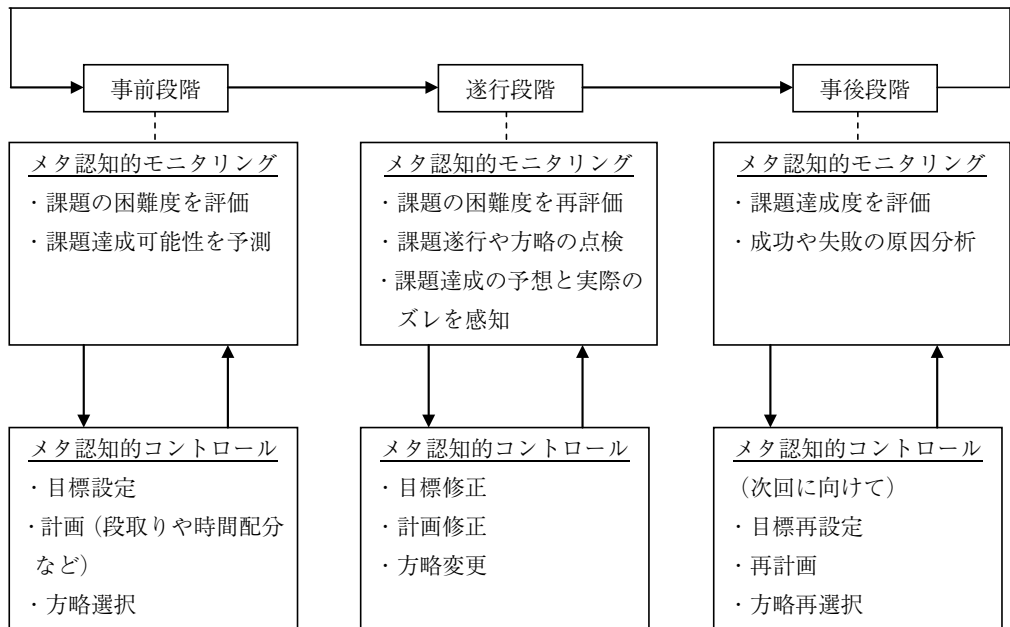


図2 メタ認知的活動の分類 (三宮, 2008)

に気をつける」といった、モニタリングの結果を踏まえた活動を行うことがある。こうした、目標設定（修正）・計画（計画修正）等を行うことについてはメタ認知的コントロールと呼ばれている。

メタ認知的モニタリングとメタ認知的コントロールは循環的に働くと考えられており、モニターした後にコントロールを行い、コントロールの結果を再度モニターし、必要なコントロールがあれば行う、といった形をとるとされている（三宮, 2008）（図2 参照）。

こうした、メタ認知的知識やメタ認知的活動は、学習活動を進める上では極めて重要なものとされている。たとえば田中（1992）は、精神遅滞児を対象に、物語の理解過程について検討を加えた。その結果、自身の既有知識、物語の構造的性といった、何かを手がかりにして読んで行くというメタ認知的な知識、あるいは、読む過程で課題を行うのに有効な方法を用いるなど、自身の活動を調整するメタ認知的活動が理解に大きな役割を果たすことが示された。岡本（1992）は、小学生を対象に算数の文章題課題

を行い、ワークシートやインタビューを行いながら、課題遂行結果の予想、問題の理解、問題解決に対するプランニング、問題遂行、結果への評価について検討を加えた。その結果、課題得点の高い被験者ほど、これらのプロセスを正確にモニタリングしていることが明らかとなった。

ただし、メタ認知的活動はメタ認知的知識に基づいて行われるため、メタ認知的知識に誤りがある場合、メタ認知的活動は不適切なものになりやすいとの指摘も見られる（三宮, 2008）。そのため、メタ認知的モニタリング・メタ認知的コントロールを適切に、かつ効率よく行う上では、まず学習者自身が適切なメタ認知的知識を有することが必要と言えよう。

そこで、以下では特に「メタ認知的知識」に焦点を当て、文章産出プロセスに関わる書き手のメタ認知的知識の側面について概観する。

### Ⅲ 文章産出に関わるメタ認知的知識の側面に関する検討

以下では、先行研究を基に、文章産出プロセスに関わる書き手のメタ認知的知識について検討を加える。

文章産出スキルを育成する、あるいは、産出文章の質を高めることを考える上では、まず、文章の評価にどのような側面が影響を与えるのかを概観する必要がある。そこで、以下では主に、文章評価に関わる知見に焦点を当て、産出文章の質に影響を与える側面について検討する。

Voss, Vesonder and Spilich (1980) は、大学生を対象に、野球に関する文章を産出させた。その結果、野球に関する知識の多い書き手の文章の方が、より分かりやすいと評価されることを明らかにした。しかし、単に知識量だけが産出文章の質を規定するわけではない。Langer (1984) では、書き手が持っている知識量よりもむしろ、持っている知識をまとめることや、並べ替えて文章化するなど、知識の構造化が産出文章の質に強く影響することが示された。岸・綿井 (1997) は、日本人の大学生を対象として、テニスのゲーム進行に関する文章を産出させた。そして、読み手に合わせて伝える内容を選ぶ必要があることを見出した。Burtis, Bereiter, Scardamalia and Tetroe (1983) は、文章産出の熟達者・非熟達者それぞれに対し、文章を産出させる課題を行った。そして、熟達者の場合、文章の内容が自分の言いたいことを表しているかどうかを確認できるのに対し、非熟達者の場合はそれができないことを明らかにした。ただし、「〇〇を付け加えることで、このことをもっと詳しく説明できる」、「そのことをもっと簡単に言う…」といった、文章の完成度を高める上での外的な手がかりを与えた場合、非熟達者であっても文章が自分の言いたいことを表しているかどうかを確かめられるようになる、との報告も見られる (Scardamalia, Bereiter and Steinbach, 1984)。

また、Scardamalia ら (1984) は、文章産出プロセスにおいて書き手が意識していることがらには、内容的側面 (何を書くか)、修辞的側面 (内容をどのように書くか) という2側面が存在することを見出した。この成果を踏まえ、堀田 (1992a, 1992b) は、大学生および小学生を対象として、情報伝達文および情意文を産出させる課題を行った。そして、Scardamalia ら (1984) に基づき、文章産出プロセス中における意識の内省を検討した結果、年齢が上がるにつれて修辞的側面に対する意識が高まることを示した。しかし、日本人学生の場合、文章を書く時に最も重視していることは「何を書くか」(内容的側面) であり、「どのように書くか」(修辞的側面) ではないことも併せて示した。以上の知見を踏まえると、産出文章の質に影響を与える側面として、書く内容、内容の構造化、産出文章中の内容に関するセルフモニタリングといった事項が考えられる。このうち、書き手のメタ認知的知識に関連する事項としては、内容・内容の構造が挙げられる。

こうした、産出文章の質に影響を与える側面の検討に加え、文章の評価観点や評価に着目した知見もいくつか得られている。

古田 (2008) は就職用小論文及び大学入学試験用小論文の評価および添削結果について検討を加えた。そして、就職活動用小論文の評価に影響を与える要因として「表記」「筋道・論理・構成」「内容の整理」「アイデアのよさ」などの10側面の存在を見出した。また、これらが「アイデア」(アイデアのよさ、見識：内容的側面)、「内容構成」(内容整理、筋道・論理・構成：構成的側面)、「表記、印象」(印象、表記：修辞的側面) の3側面に集約されることも示した。さらに、大学入学試験用小論文については「題意理解」「アイデア」「論理構成」の3側面が評価に影響を与えること、これらは「題意理解と論理的展開」という一側面に集約されることも示した。Remondino (1959) は、国語教師を対象に作文評価観点について質問し、そこで得られた17項目を開いて、作文の評定の構

造を検討した。その結果、「外見の美しさ」「用語力」「内容と構成」「内容の個人的側面」の4つの観点を抽出した。また、Freedman (1979)は、作文の評価観点のうち、「内容」と「構成」が最も評価に影響を与えたこと、文の構造や技巧は影響力が小さかったことを報告した。これらを受けて渡部・平・井上(1988)は15の観点で高校生の産出した小論文を評価し、評価観点の構造について検討を加えた。その結果、分析的評価のための諸観点として、少なくとも「内容に関するもの」と「言語力に関するもの」の2側面に分類できることを示唆した。

平(1995)は、中学生・高校生が産出した物語文の評価結果を踏まえ、評価の観点として「文章力(内容、構成力、ストーリーの構造化等)」「基礎的言語能力(基本的文法、漢字等)」の2側面が存在することを見出した。金子(2008)は、200字短作文ではあるものの、再履修学生を対象とした文章産出課題(単位取得にいたらなかった理由、これから単位取得に向け、各自の学習課題を明らかにするとともに、その解決策を述べるもの)について、「意識面(学習意欲、スキル意識等)」「形式面(形式段落、記述量、文法、文体、語句、文字・表記)」「思考面(主題/題/構成)」の3側面の観点を使って採点を行っている。意識面は授業に関連する内容ではあるものの、残り2側面は、文章一般の評価を行う観点と合致していると考えられる。中尾(2009)は、大学1年次生の産出した意見文について検討を加えている。その中で、評価観点として「段落」「文体」「表現」「文」「表記」「構成」「根拠」を挙げた。様々な側面が挙げられているものの、主に修辭的側面、構成側面の2側面に関する評価はなされているものと考えられる。

こうした側面は海外の先行研究においても検討されている。Butcher & Kintsch (2001)は大学生の論作文を題材とした研究を行っている。その際、「内容」「構成」「修辭」の3側面および総合得点の計4側面から書き手、産出文章の評価を行っていた。

また、近年では文章の自動採点システムが、アメリカや日本で開発され、アメリカでは実際の運用をされるようになっている。石岡(2009)は代表的なエッセイ自動採点システム(E-Rater, PEG, IntelliMetric, IEA, Jess等)をとりあげ、採点に用いられている観点について説明している。それによると、E-Rater (Attali & Burstein, 2005)では、総ワード数に対する①文法エラーの割合、②語の使用法についてのエラーの割合、③手順のエラーの割合、単語の繰り返しを示す指標等、文法、語の使用法、技工、文体、組織化、展開等、主に修辭や論理構成の側面の得点化を行っている。PEGでは、総合点に加え、内容、組織化、スタイル、メカニクス、独創性などの観点を取り上げられている。IntelliMetric (Elliot, 2003)では、①目的や主題に対する結束性や一貫性、②内容の幅や発想の展開、③論旨の展開や文章構成、④文の完全性や多様性、⑤英語のルールへの適合の主に5観点が採用されている。IEAでは①内容(LSAから生成された2つの特徴量である文章品質とドメインとの関連性)、②文体(首尾一貫性と文法)、③技巧(句法、スペル)の主に3観点が挙げられる。

これらは主に英語を対象とした自動採点システムであるが、日本では、JESSが開発された(石岡・亀田, 2003)。JESSはAWA(アメリカの経営大学院(ビジネススクール)への入学試験であるGMATにおける採点基準をほぼ踏襲し、修辭、論理構成、内容の3観点から評価を行う日本語小論文自動採点システムである。

#### Ⅳ 高等学校国語科教科書における書き手のメタ認知的知識の側面

大学生の論作文産出におけるメタ認知的知識の側面について検討する上では、高等学校の国語科においてはどのような事項が取り扱われているかを検討することが有益であると考えられる。そこで以下では高等学校の国語科の教科書中の記載事項について検討を加える。

高等学校国語教科書においては、意見文、小論文産出に関して、どのような側面に注意しながら文章を産出すれば良いかについて触れられている。

崎濱（2010）は、高等学校国語科のうち、国語総合の教科書に記載されている注意事項に着目した。そして、大修館（2007）において「表現」「内容」「その他」、桐原書店（2007）において「内容」「構成」「表現」「表記」の観点が一覧されていることを指摘した。一方で、その他の教科書には観点そのものは示されていないことを報告している。しかしながら、注意すべき事項については触れられており、その数の多少はあれども、記載事項はおおむね大修館（2007）や桐原書店（2007）で挙げられていた「内容」「構成」「表現」「表記」の観点の下位項目とおおむね共通していること、および「表現」「表記」が修辭的側面に含まれるものと捉え、教科書におけるメタ認知的知識の構造に関する記載事項はおおむね「内容」「構成」「修辭」の3側面と考えられることを述べている。ただし、実際に挙げられていた事項をTRUSTIAにより分類したところ、「文体（6項目）」「誤字（5項目）」「表現（7項目）」「具体（40項目）」「内容（5項目）」「段落（5項目）」「構成（8項目）」「自分（12項目）」「題材（4項目）」「文章（6項目）」という結果となり、必ずしも「内容」「構成」「修辭」という分類がなされなかった点にも触れている。

## V 全体のまとめ

以上の知見を踏まえると、文章を評価する際の側面の一つとして「内容」「構成」「修辭」の3観点から評価を行うことが考えられる。また、文章産出スキルを高める上では、書き手自身もこうした3観点を反映させたメタ認知的知識を有し（あるいは重視し）、実際の文章産出活動においてもそれらを効果的に使用する（メタ認知的活動を行う）ことが求められると考えられる。ただし、崎濱（2010）が触れたよう

に、メタ認知的知識の中身として実際に挙げられた事項を分類した場合、必ずしも「内容」「構成」「修辭」の観点に分類されないことも考えられるので、この点についてはさらなる検討が必要であると言えよう。

一方で、このような知見も得られている。崎濱（2003）は、説明文（崎濱では「情報伝達文」）産出時における書き手のメタ認知的知識の構造について検討を加えた。その結果、「伝わりやすさ」「読み手の興味・関心」「簡潔性」の3因子が抽出された。崎濱では「伝わりやすさ」「読み手の興味・関心」がおおむね「内容的側面」、「簡潔性」がおおむね「修辭的側面」に相当するものとし、書き手のメタ認知的知識の側面が「内容」「修辭」の2側面存在することを指摘した。山田・近藤・畠岡・篠崎・中條（2010）は、カジメ、セイウチ、ゆずなどについて、大学生または小学校3・4年生に向けて説明する際の書き手のメタ認知的知識の構造について検討を加えた。その結果、「表記・表現の容易性」「流れやまとまりに対する配慮」「読み手の興味・関心への配慮」「具体性」「説明すべきものの先行提示」の5因子を抽出した。このうち、「表記・表現の容易性」は「修辭的側面」に、「流れやまとまりに対する配慮」は「構成側面」に、「読み手の興味・関心への配慮」「具体性」「説明すべきものの先行提示」に記された項目はおおむね「内容的側面」に対応するものであると考えられる。これらの知見を踏まえると、書き手のメタ認知的知識の側面はおおむね「内容」「構成」「修辭」の3側面であると考えられるが、崎濱（2003）や山田（2010）のように対応関係が実際に成り立つと言えるのかどうか、今後詳細に検討する必要がある。

## 参考文献

- Attali, Y., & Burstein, J. (2005). Automated essay scoring with e-rater v.2.0 (ETS RR-04-45), Princeton, NJ: Educational Testing Service.
- Bereiter, C., & Scardamalia, M. (1987). *The Psychology of Written Composition*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

- Brown, A. (1980). Metacognitive development and reading. In R. J. Spiro, B. C. Bruce, & W. F. Brewer (Eds.), *Theoretical issues in reading comprehension*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp.453-481.
- Burtis, P. J., Bereiter, C., Scardamalia, M. and Tetroe, J. (1983). The development of planning in writing. In Kroll, B. M. and Wells, G. (eds.), *Explorations in the development of writing*. John Wiley and Sons, Chicester, England.
- Butcher, K. R., & Kintsch, W. (2001). Support of content and rhetorical processes of writing: Effects on the writing process and the written product. *Cognition and Instruction*, 19, 277-322.
- Elliot, S. (2003). IntelliMetric: From Here to Validity. 71-86. In Shermis, M. & Burstein, J. (Eds.) *Automated essay scoring: A cross-disciplinary perspective*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ertmer, P. A., & Newby, T. J. (1996). The expert learner: Strategic, self-regulated and reflective. *Instructional Science*, 24, 1-24.
- Flavell, J. H. (1979). Metacognition and cognitive monitoring. *American Psychologist*, 34, 906-911.
- Freedman, S. W. (1979). How characteristics of student essays influence teacher's evaluations. *Journal of Educational Psychology*, 71 (3), 328-338.
- 福岡寿美子 (2006). リメディアル教育としての基礎演習における日本語表現—アカデミック・ジャパニーズの観点を中心に— 流通科学大学教育高度化推進センター紀要, 3, 23-33。
- 古田貴久 (2008). 受験参考書に見る小論文試験の目的と評定構造の関係 日本教育工学会論文誌, 32, 231-239。
- 堀田朱美 (1992a). 文章産出における修辭的及び内容的意識に関する検討 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 39, 89-95。
- 堀田朱美 (1992b). 文章産出における書き手の修辭的及び内容的意識に関する発達の検討 日本教育心理学会第34回総会発表論文集, 404。
- Intersegmental Committee of the Academic Senates. (2002). *Academic literacy: A statement of competencies expected of students entering California's public colleges and universities*. Sacramento: ICAS.
- 石岡恒憲 (2009). 小論文自動採点 電気通信情報学会誌, 92 (No.12), 1036-1040。
- 石岡恒憲・亀田雅之 (2003). コンピュータによる小論文自動採点システム Jess の試作 計算機統計学, 16 (1), 3-18。
- 金子泰子 (2008). 大学初年次生のための文章表現指導—際履修生の実態とその評価— 長野大学紀要, 30 (2), 117-130。
- 桐原書店 (2007). 探求国語総合 桐原書店
- 岸学・綿井雅康 (1997). 手続き的知識の説明文を書く技能の様相について 日本教育工学雑誌, 21, 119-128。
- 向後千春 (2002). 言語表現科目の9年間の実践とその再設計 大学教育学会誌, 24, 98-103。
- Landauer, D., Laham, D., & Foltz, W. P. (2003). Automated scoring and annotation of essays with the intelligent essay assessor. In Shermis, M. & Burstein, J. (Eds.), *Automated essay scoring: A cross-disciplinary perspective*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Langer, J. A. (1984) The effects of available information on responses to school writing tasks. *Research in the Teaching of English*, 18, 27-44.
- McCormick, C. B. (2003). Metacognition and Learning. In W. M. Reynolds & G. E. Miller (Eds.), *Handbook of psychology*. Vol.7. Educational psychology. Hoboken, NJ: Wiley. pp.79-102.
- 中尾桂子 (2009). 語彙の統計量と総合評価の関係—作文評価の基準特定にむけて— 大妻女子大学紀要—文系—, 41, 130-146。
- 岡本真彦 (1992). 算数文章題の解決におけるメタ認知の検討 教育心理学研究, 40, 81-88。
- 小野米一 (1998). 大学生への作文教育実践 語文と教育, 12, 43-53。
- Persky, H., Daane, M., & Jin, Y. (2003). *National assessment of educational progress: 2002 report card for the nation and the states*. Washington, DC: US Department of Education.
- Ransdell, S., & Levy, C. M. (1996). Working memory constraints on writing quality and fluency. In Levy, C. M., & Ransdell, S. (Eds.), *The science of writing: theories, methods, individual differences, and applications*. Mahwah, NJ: Laurence Erlbaum Associates, pp.93-106.
- Remondino, C. (1959). A factorial analysis of the evaluation of scholastic compositions in the mother tongue. *British Journal of Educational Psychology*, 30, 242-251.
- 崎濱秀行 (2003). 書き手のメタ認知的知識やメタ認知的活動が産出文章に及ぼす影響について 日本教育工学雑誌, 27, 105-115。
- 崎濱秀行 (2005). 字数制限は、書き手の文章産出活動にとって有益であるか? 教育心理学研究, 53, 62-73。
- 崎濱秀行 (2008). 字数制限文を繰り返し書くことが書き手の文章産出活動や産出文章に及ぼす影響



- 日本教育工学会論文誌, 32 (Suppl.), 129-132。
- 崎濱秀行 (2010). 論作文産出における書き手のメタ認知の様相 日本読書学会第54回研究大会発表資料集, 85-92。
- 三宮真智子 (2008). メタ認知—学習力を支える高次認知機能— 北大路書房。
- Scardamalia, M., Bereiter, C., & Steinbach, R. (1984). Teachability of reflective processes in written composition. *Cognitive Science*, 8, 173-190.
- Schraw, G., & Moshman, D. (1995). Metacognitive theories. *Educational Psychology Review*, 7, 351-371.
- 私学高等教育研究所 (2003). 「私立大学における1年次教育の実態—「学部長調査」(平成13年度)の結果から」 私学高等教育研究所調査報告書
- 平直樹 (1995). 物語作成課題に基づく作文能力評価の分析 教育心理学研究, 43 (2), 134-144。
- 大修館 (2007). 新編現代文改訂版 大修館
- 田中真理 (1992). 精神遅滞児の物語理解におけるメタ認知能力の役割 教育心理学研究, 40, 185-193。
- Voss, J. F., Vesonder, G. T., & Spilich, G. J. 1980

- Text generation and recall by high-knowledge and low-knowledge individuals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 19, 651-667.
- 渡部洋・平由美子・井上俊哉 (1988). 小論文評価データの解析 東京大学教育学部紀要, 28, 143-164。
- 山田恭子・近藤綾・畠岡優・篠崎祐介・中條和光 (2010). 説明文産出におけるメタ認知的知識の構造 広島大学心理学研究, 10, 13-25。
- 吉倉紳一 (1999). 全学必修科目「日本語技法」の新設とそのマニュアル作成の経験 大学教育学会誌, 21 (2), 82-86。

#### 〔付 記〕

本研究は、平成21年度-24年度科学研究費補助金（若手研究B 研究課題番号21730533）の成果報告の一部である。

(2012年11月22日掲載決定)